

中間言語語用論に基づく誤用から見た中国の日本語教育

—江蘇大学日本語専攻を中心に考察して—

趙 康英・福岡 昌子

从中介语语用失误看中国的大学日语教育

—以江苏大学日语专业为考察对象—

ZHAO Kangying, FUKUOKA Masako

【摘要】

中介语语用失误是外语学习者的语言特征之一。跨文化交际中，语用失误比语言失误带来的潜在障碍更加明显，可能引起相互间的误解甚至导致文化的冲突。本文从中国大学日语专业的教学实际出发，结合日语专业学生的实际掌握情况，从中日两国特定的文化背景入手，探讨由文化因素带来的中介语语用失误的原因，并从课程设计、教材选择、教师队伍、教学方法角度对中国大学日语教育改革中现存的一些问题提出探讨性建议。

【キーワード】 中間言語語用論 誤用 日本語教育 中国人学習者

1. はじめに

グローバル化が進む中、中国における大学日本語教育⁽¹⁾方針は、単なる「構造中心」の勉強法から、日本語を通じて異文化に対する理解を深め、実践的異文化コミュニケーション能力の育成へと変化してきた。目標も、翻訳や通訳の人材養成から、高度な日本語運用能力と高い理論水準を有する質の高い複合型人材の育成へと変わってきた。しかし、日本語専攻の学習者は日本語国際能力試験1級に合格しても、また、どんなに基礎的な言語面では正しい表現ができていても、コミュニケーション自体が機能していない場合も多い。その原因はいろいろあるが、そのうち、中間言語語用論 (interlanguage pragmatics) に基づく誤用がその要因の一つとして高く注目されている。

本研究では、江蘇大学日本語専攻の学習者の実例を用い、文化的な視点から日本語専攻の学習者はどのような中間言語語用論における誤用を犯し、その原因が何かを分析する。そして、どのようにすれば大学四年間で言語能力から語用能力へと向上させ、さらに、異文化コミュニケーション能力までしっかりと身に付けさせることができるか、効率的な教育方法について考察する。

2. 先行研究

2.1 中間言語語用論

言語教育における研究は1950年代から1960年代までの「対照分析仮説」時代から第二言語習得研究の「誤用分析」の時代を経て、1970年代の「中間言語語用」の時代に入った。龍翔(2012)によると、中間言語(interlanguage)とは外国語学習者がそれぞれ持つ、母語とも目標言語とも違う、過渡的な目標言語(target language)の体系のことであり、語用論とは、AustinやSearleの研究に端を発し、理論言語学の一分野で、「言葉の意味」と「話し手が伝えたい意図」を区別して考え、両者のズレを研究対象にする学問であるが、二十世紀80年代から外国語学習者の中間言語を語用論的な視点から調査・分析を行う分野を中間言語語用論(interlanguage pragmatics)と呼び、基礎段階の外国語学習者にはなく、上級学習者を対象に、コミュニケーション能力の養成を目指した教育方針を主なターゲットにしているのが特徴であるとされている。

対照分析仮説時代の誤用は母語干渉が主な原因だと思われ、学習者の母語と目標言語との比較から、学習者が外国語を学習する際に起こりうる問題の予測が可能であるとされ、すべての誤用が「悪」と思われ、許さず排除されると考えられていた。しかし、誤用の分類が進むにつれ、対照分析仮説では予測できない例が次々指摘され、母語干渉では説明できない学習者言語の実態が明らかにされてきた。対照分析は次第に効力を失うようになり、誤用分析の時代がやってくることとなる。誤用も学習者の学習困難点や習得過程を示すとし、誤用から何かを学ぼうと考えられてきたが、できないことだけ注目し、学習者言語の全体像が不明だとか、習得過程や習得順序が把握できないとか、誤用の原因が究明できないなどと誤用分析にもいろいろ問題点が指摘されるようになった。すると、誤用を第二言語習得発達プロセスの一環として、しかも正用と共に、さらに運用分析や談話分析にまで広げていた中間言語語用時代に入ってきた。表1の通り、中間言語語用時代における誤用研究は誤用にこだわらず、さらに広く、全面的且つ積極的に進んでいくようになった。

表 1. 対照分析仮説・誤用分析・中間言語語用研究比較表⁽²⁾

	対照分析仮説	誤用分析	中間言語語用
研究対象	書面、文献	書面、事例	書面と口頭、実証
誤用原因	母語干渉	母語干渉 非母語干渉（言語内誤用）	母語干渉、誤用ルールの拡大化、 回避・省略
研究内容	母語と目標言語との 類似点、相違点 言語能力	誤用の分類、原因、評価 言語能力、語用能力	誤用と正用、言語能力、語用能力、 異文化コミュニケーション能力
研究方法	共時的研究	共時的研究	共時的と通時的の研究
研究範囲	一面的で静的	一面的で静的	全面的で動的プロセス
研究態度	消極的、排除	消極的、減少	積極的、習得の特徴

中間言語誤用分類について、基準によって大きく違っているが、Thomas (1983) は中間言語の誤用を文法や使うべき単語を間違えた為に、相手に自分の意図を伝えることができなかつた言語に基づく誤用 (linguistic failure) と適切と思われる発話をしなかつた為に、自分の意図したコミュニケーションが取れなかつた語用論に基づく誤用 (pragmatic failure) に分け、「語用論に基づく誤用」は「言語に基づく誤用」よりも影響が大きく、話し手の社交マナー、さらに道德の面で失格する恐れがあると述べている。つまり、「暖かいでしたね」や「ご飯が食べます」とか聞いたらはっきり分かる文的誤りは言語に基づく誤用であり、「先生も食べたいですか」とか「何か飲み物、ほしいですか」など文法上は正しいが何かおかしく、談話上許容できない誤りは語用論に基づく誤用である。

2. 2 中国人学習者の中間言語語用に基づく研究

中国国内においての研究はやや遅れ、しかも英語を中心に展開しており、何自然 (1996) 「中間言語語用論とは何？」という文で初めて中間言語語用論の特徴、研究内容、語用論に基づく誤用について国外の研究実態を紹介した。劉紹忠 (1997) は中間言語語用論の国内外の現状について比較研究し、胡文仲 (1999) は学習者の語用能力や異文化コミュニケーション能力を育てるには語用知識や異文化知識を大量にインプットしなければならないと述べている。また、『語用学と英語学習』、『新編語用学概要』、『語用学概論』などの著書も次々と出版された。中国の vip 検索サイトによると、1989 年～2012 年、「語用」と「外国語」をキーワードで検索してみると ssci に収録された論文が 406 篇あり、そのうち、日本語に関する語用研究は 23 篇で 5.7% を占めている。鐘茜韻 (2012) では 2008～2012 年 ssci の 8 種類の雑誌⁽³⁾ に収録された語用研究に関する論文が 262 篇あり、そのうち、英

語語用研究は 56.5%で、日本語語用研究は 3.44%であり、小語種⁽⁴⁾ 外国語の研究遅れは外国語言語学の発展を制約する要因の一つであると述べている。また、内容から見れば、主に文法体系の解明を中心に研究が進められてきたのである。

中国人の日本語学習者の誤用研究も盛んに行われているが、張麟声（2001）は日本語教育のための誤用分析（母語干渉を中心に）、王国華（2003）は語彙や文法など言語面に中国人日本語学習者が間違えやすい表現について、山崎（2006）は中国語母語話者の作文に見られる誤用、望月（2009）はボイスの誤用分析、木村（2009）は助詞の誤用、三浦（2009）は特定の語に繰り返し見られる誤用など、主に日本語学習者の習得過程の理論的解明と日本語言語文法の体系的規則の解明に力を入れていた。しかし、誤用分析についての研究は深まっていく一方で、日本語教育における誤用分析の活用は効果的に教育現場で生かされているのだろうか。

3. 中国における教育現場

3. 1 問題点提出

次のデータ収集は筆者が担当した江蘇大学日本語専攻の「翻訳理論と実践」という授業で翻訳練習や宿題から選んだ 8 例を考察し、江蘇大学日本語学科二年生 24 名（延べ授業時間数は約 900 時間である）と三年生（延べ授業時間数は約 1400 時間である）51 名の在籍者、合わせて 75 名を対象に、電子辞典や参考書など使わずに 20 分内で独自で完成するように実施した。

75 部の訳文に（○）で正しい表現、（×）で代表的な誤用表現を抜粋させ、「その他」は本論の研究対象ではないので、考察しない。

3. 2 調査結果

75 部回収し、以下の通りに結果をまとめた。

例 1. 好好检讨自己做的事吧。

（○）訳文 1：自分のしたことをよく反省してごらん。

（×）訳文 2：自分のしたことをよく検討してごらん。

（○）の訳文 1 は解答者 30 名で 40%で、（×）の訳文 2 は 28 名で 37.3%となり、ほとんど変わらない。誤用のうち、二年生は 7 名 29.2%で、三年生は 21 名 41.2%にも達している。「その他」には「考える」、「思う」などの表現が多い。

例 2. 研究一下再决定吧！

（○）訳文 1：検討してから決めましょう。

（×）訳文 2：研究してから決めましょう。

(○) の訳文 1 は解答者 7 名で 9.3%、(×) の訳文 2 は 36 名で 48%、誤用は正解の約 5 倍になっている。誤用のうち、二年生は 14 名 58.3%で、三年生は 22 名 43.1%になっている。「その他」には「考える」、「相談する」などの表現が多い。

例 3. (学生和日本老师一起用餐)

学生：老师也想尝尝吗？

(○) 訳文 1. 学生：先生も召し上がってみたら (いかがですか)。

(×) 訳文 2. 学生：先生も召し上がりたいですか。

(○) の訳文 1 は「～みたらいかがですか・～ませんか」など婉曲表現を使うケースで、解答者 17 名、22.7%を占め、(×) の訳文 2 は「召し上がりたいですか」という直訳を取ったケースで、28 名の 37.3%を占めている。誤用のうち、二年生は 12 名 50%で、三年生は 16 名 31.4%になっている。「その他」には「召し上がってください」とか意志を強める表現が多い。

例 4. 挥金如土。

(○) 訳文 1. お金を湯水のように・むやみに使います。

(×) 訳文 2. お金を土のように使います。

(○) の訳文 1 は「湯水のように」という慣用表現を使うケースで、解答者 36 名 48%を占め、(×) の訳文 2 は「土のように」という直訳を取ったケースで、18 名 24%を占めている。誤用のうち、二年生は 9 名 37.5%で、三年生は 9 名 17.6%になっている。「その他」には「めちゃくちゃ」や「大量」などずれている表現が多い。

例 5. 老师，很重吧。我来帮您拿吧！

(○) 訳文 1. 先生、重いでしょう。お持ちしましょうか。

(×) 訳文 2. 先生、重いでしょう。持ってさしあげましょうか。

(○) の訳文 1 は「お持ちする」など自分を低くする謙譲表現で、解答者 17 名、18.7%を占め、(×) の訳文 2 は「持ってさしあげる」という直訳を取ったケースで、28 名 37.3%を占めている。誤用のうち、二年生は 14 名 58.3%で、三年生は 33 名 64.7%になっている。「その他」の訳文の多くは「持ちます」や「持ちましょう」など意志を強める表現が多い。

例 6. 您专程赶来，十分感谢。

(○) 訳文 1. わざわざおいでいただいて・くださって、ありがとうございます。

(×) 訳文 2. わざわざいらっしやって、ありがとうございます。

(○) の訳文 1 は「おいでいただいて・くださって」など補充授受動詞を使うケースで、解答者 49 名 65.3%を占め、(×) の訳文 2 は「いらっしやって、おいで

になって」という動詞だけを使ったケースで、21名 28%を占めている。誤用のうち、二年生は1名 4.2%で、三年生は20名 39.2%になっている。「その他」には「来ることができ」などの間違い表現が多い。

例7. (好朋友会話) 昨天去市里干嘛了呀? 去看电影了。

(○) 訳文1. 昨日、町へ行ったの?

ええ、映画(を)見たんだ。

(×) 訳文2. 昨日、町へ何をしに行きましたか。

町へ映画を見に行きました。

(○) の訳文1は話し言葉で、解答者39名 52%を占め、(×) の訳文2は丁寧語を使ったケースで、32名 42.7%を占めている。誤用のうち、二年生は11名 45.8%で、三年生は21名 41.2%になっている。「その他」には意味がわからない表現が多い。

例8. (向五十岁左右的日本女性问路) 阿姨，对不起请问一下，火车站怎么走?

(○) 訳文1. あのう、すみませんが駅へはどう行ったらいいでしょうか。

(×) 訳文2. おばさん、すみませんが駅へはどう行ったらいいでしょうか。

(○) の訳文1は「阿姨」を略し、「あのう・すみません」から発話し、解答者13名で17.3%を占め、(×) の訳文2は「阿姨」を「おばさん」に訳し、42名、82.7%を占めている。誤用のうち、二年生は21名 87.5%で、三年生は41名 80.4%になっている。

4. 考察

上の中間言語における誤用を分析してみると、言語に基づく誤用と語用論に基づく誤用に分けられ、例(1)と例(2)は言語に基づく誤用で、例(3)～例(8)は語用論に基づく誤用であることが分かった。

4. 1 言語に基づく誤用

「研究」、「検討」、「反省」この三つの単語は中国語でも日本語でもあり、しかも、全員すでに習った単語だ。

例(1)の誤用は37.3%で、例(2)の誤用は48%になっている。その原因の一つは漢字による同形異義語ではないだろうか。漢字があることによって、中国人学習者にとってはメリットがあるのは確かだが、漢字があるからこそ、母語干渉で言語に基づく誤用が多く生じるのも事実ではないかと考えている。

また、言語に基づく誤用は教材などによる例も少なくない。「研究」、「検討」、「反省」それぞれ基礎段階の教材である上海外国語教育出版社の『新編日語』から出ている単語だが、

「研究」を例に取ると、表2の通り、中国語の「研究」①は日本語の「研究」と同じ意味で、中国語の「研究」②は日本語の「検討」とほとんど同じ意味なので、教科書に載っている単語の説明を習う時、教師の説明がなければ、日本語の「研究」は中国の「研究」と同じ意味だと思えるのも当然なことであるし、そのうち48%の誤用が生じてくるのもおかしくはないのである。

表2. 「研究」の日中意味比較表

	中国新華字典によると	日本語大辞林によると
研究	①钻研; 探求事物的性质、规律等 (=研究する)。	物事を詳しく調べたり、深く考えたりして、事実や真理などを明らかにすること。また、その内容。
	②考虑; 商讨 (=検討する)。	

4. 2 語用論に基づく誤用

例(3)～(8)は言語の面では間違っていないが、どこことなく違和感のある表現だと感じている。このような言い方は中間言語語用論における誤用であり、学習者がアウトプットした情報と日本人の相手側がインプットした情報とが一致していないことによって語用論に基づく誤用を生じたのである。次の五つの面から語用論に基づく誤用を引き起こす文化要因について分析しようと思う。

4. 2. 1 思考様式の移植

例(3)中国語の「你想……吗？」は「～たいですか」という意味で、人の意見や考えを聞く時によく使われている。「先生も召し上がりたいですか」は言葉にも文法にも問題ないが、いくら尊敬する気持ちを持って聞いても、日本人教師が聞いたなら、眉をひそめるだろう。「はい」と答えたら、口が卑しいと思われるが、「いいえ」と答えたらせつかくの厚意を断り、失礼になるかもしれないととても困ってしまうだろう。日本人は自分の意見を正直に言うよりその場の雰囲気や相手の気持ちを尊重して話すのに対して、中国人は他人のことをあまり気にせず直接的な表現を多く使う。もし言いたいことをそのまま直訳すれば、文法的に間違っていないとしても、日本人が普段使わないようなきつい表現になってしまい、不快を感じさせ、コミュニケーションに支障をきたすことになる恐れがあるので、日本語専攻の学生としては中国式な思考様式の移植を避け、日本の曖昧な空気を読む力を身に付けなければならないだろう。

4. 2. 2 レトリック文化による連想の違い

例(4)の「挥金如土」は四字熟語で、中国は広く、土と言えはいくらでもあり、「お金を土のように使う」ことは金銭を惜しげもなくむやみに費やすことを表しているが、24%の学生がこう訳したのは自文化的背景のマイナス影響を受け、日本語の中にはこのような言い方がなくても、意味がおおまかに当たるだろうと思っているのである。しかし、日本は島国で海に囲まれ、土に対するイメージは中国とは違い、そして、火山が多く、温泉がいたるところから沸々と沸いているので、「湯水のようにお金を使う」で同じ意味を表しているのである。同じことを表すのにも日中は歴史的、文化的に多々違っているので、同じ表現を使うと誤用をもたらすリスクが高いことにも注意すべきである。

4. 2. 3 語用ルールの違い

例(5)と例(6)は恩恵的行為の授受であるが、例(5)は相手側が恩恵を受け、例(6)は自分側が恩恵を受けるとされている。例(5)の「帮您」は日本語に直訳すれば「手伝ってさしあげます」になるが、中国語の「帮您～」とは、「大丈夫ですよ、何とかいたしますから」という安心感を与え、特に人を助けようと決意するイメージが強い。「12580」は中国の大手電気通信事業者である「移动通信」の問い合わせ番号で、「12580」と「一按我帮您(かけると手伝ってさしあげる)」は発音が近いので、「12580 一按我帮您」という言葉をキャッチフレーズとして使い、移动通信のユーザーならこの電話一本ですべての問題が解決できるという意味である。しかし、日本語には「～てあげる」、「～てさしあげる」という自分が相手の利益になるようなことをする場合に使う言葉が、面と向かって言うとおかしく、「恩着せがましい」と感じられるので、申し出表現の「お～しましうか」というように、自分がへりくだる「謙讓語」を使う方が普通である。一方、例(6)の「您赶来」は直訳すれば「あなたがいらっしやって」になるが、自分側が利益を受けた場合、中国語では授受動詞を使わなくてもいいが、日本語では大変失礼なことになってしまう。中国は「帮您」という仁を中心とする思想体系であるのに対して、日本は「～ていただく」という恩を中心とする思想体系であるから、このような文化の違いによって言語の語用ルールも大きく違っていると考えている。

4. 2. 4 不適当な言語のインプット

例(7)の「去～干～(～へ～をしに行く)」は一年生前期の一冊目(周平、陳小芬、1993: 306)第16課の会話に出ている表現で、「文法解説」には「レストランへフランス料理を食べに行きます。(去西餐馆吃法国菜。)」と「何をしに上海に来ましたか。(来上海做什么?)」という例で説明している。先生の説明も「スーパーへ買い物に行く」や「映画館へ映画を見に行く」などで、文法的な構造は日本語とほとんど同じで、学習者にとっては難しくな

くすぐに習得してしまう。ある学生は町で日本人教師に偶然出会った時、「先生、何をしに町に来ましたか」と本に載っている正しいと思っている文法を活用してみたそうだ。もちろん、学生だから、日本人の先生はよく理解してくれると思うが、日本語ではこのような表現はあまり使わない。例(1)のように親しい友達同士の会話では、「行きましたか」という使い方はあまり自然ではなく、「何をしに来た」という人のことを細かく聞く表現も避けたほうがよい。また、「何をしに来た」という使い方はよく人を問い詰める時に使われているので、社会に出てから、このような言語のインプットをそのままアウトプットしたら、相手に失礼な言い方になってしまう。

4. 2. 5 言葉の意味転換の違い

例(8)の「阿姨」は中国語で①おばさん、おねえさん；②先生、幼稚園の先生や保育園の保母を呼ぶ言葉；③お手伝いさん、ホームヘルパー；④方言でおば、母の姉妹を指す。普通よその大人の女性を指して言う場合は呼びかける人と呼びかけられる人の年齢差や状況に左右されることもあるが、自分の母親とほぼ同じ年齢の女性のことを尊敬して「阿姨」と呼ぶのが無難である。したがって、二十代の女性は幼稚園の子供に、五十代の女性は二十代の若者に「阿姨」と呼ばれるのはよくある。一方、日本語の「おばさん」は広辞苑によると①(主に年少者が)よその年配の女性を親しんで呼ぶ語；②伯母・叔母を敬って、また親しんで呼ぶ語を指しているが、現代日本語では辞書に載っていない一つ曖昧な意味がある。一般的には、だれかに「おばさん」と呼びかける時、ネガティブな印象を与えやすく、しかもよく自分で「私はおばさんだから」と言うのはいいが、人に「あなたはおばさんだから」と言われたら、ショックで抵抗を感じる人は多いようである。このようなネガティブな言説効果を持ち始めたのは高度成長期のアメリカ若者文化の影響を受けてからではないかと推測されている⁽⁵⁾が、言葉は文化と歴史的なつながりがあり、文化的背景なくしての言葉はないので、このような意味転換の言葉を身に付けなければならない。

上の例は誤用のごく一部しか示していないが、次の図1の通り、誤用率が割と高いことと、二年生と三年生は一年間の学習時間数の差があったが、平均誤用率は二年生46.4%、三年生44.9%で、誤用は勉強によって減らすことはできるが、あまり効果が出ないことが明らかになった。言語に基づく誤用は勉強によって防ぐことができるが、語用論に基づく誤用は自分が正しいと思っているので、そのまま定着する可能性も高い。言葉と文化はお互いに切り離せないもので、日本の文化をよく理解できなければ、日本語をうまく身に付けることはできないのである。

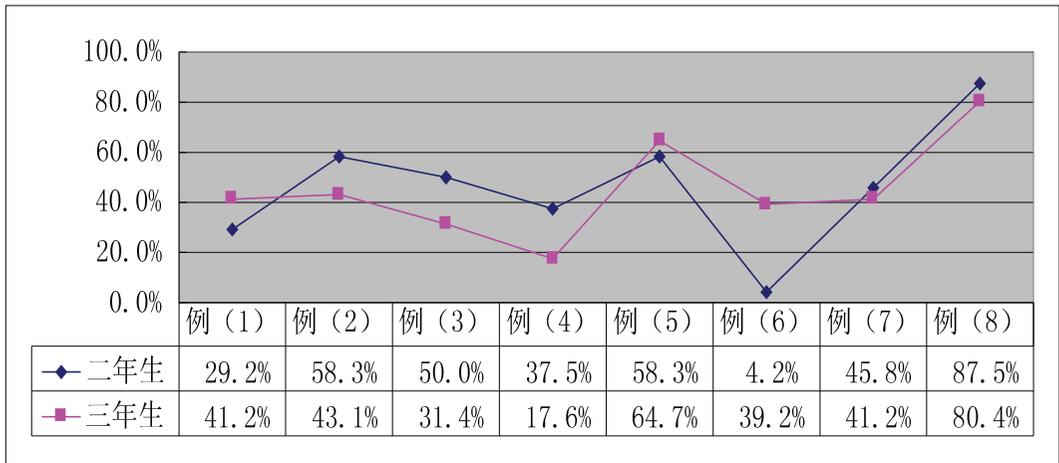


図 1. 江蘇大学日本語学科二、三年生誤用率一覧表

5. 中国における日本語教育への提言

1999 年から中国の大学増員によって日本語学科数と日本語専攻学生数は増えつつある。現在中国の大学数は 1170 にのぼり、そのうち日本語専攻を設置する大学は 466 あると（修剛：2012）されている。日本語教育界ではありがたいことであるが、教育資源不均衡により、地方の大学と大都市の大学、新設の学科と長い歴史を持つ学科との間に、教員水準、資料の有無など、かなりのばらつきがあるとされている。江蘇大学日本語専攻の教育現場を考察してみると、教育プログラムの硬直化、教材更新の遅延化、教員素質・能力向上の研修不足、教授法の理論研究と教育現場の隔たりなど、深刻な問題も抱えていると言えよう。次は江蘇大学を中心に、上の誤用原因に基づき、教育プログラム、教材、教員、教授法から中国の大学日本語教育の改革について論じたいと思う。

5. 1 教育プログラム

大学教育プログラムは社会の発展に応じて、また人材養成目標の変化によってその内容を調整している。しかし、大学日本語専攻の「基礎がしっかりしており、高い言葉の運用能力と高い理論水準を有し、質の高い複合型の高級日本語人材を養成する」という目標を目指して、各大学は教育プログラムに取り込んできたが、プログラムの更新はいつも時代の変化に追いつかないというのも実情であろう。

江蘇大学日本語専攻は 2006 年版のプログラムを使っているが、公共必修科目、公共撰修科目、基礎必修科目、基礎撰修科目、専攻必修科目、専攻撰修科目、実践科目七つの部分からなっている（詳細は後ろの資料 1 参照）。基礎段階（1、2 年生）の 2 年間には必修科目「基礎日本語」、「基礎日本語視聴説」、「日本語視聴」、「日本語会話」、「日本語

基礎作文」、「日本歴史」と撰修科目「日本新聞購読」、「日本語パソコン操作技術」が開設され、上級段階（3、4年生）の二年間には必修科目の週時間数が減り、その代わりに文化に関する撰修科目が増える。問題点は基礎段階の2年間は文法を中心とし、語用能力の養成に関する科目や時間数が少ないことと、上級段階の2年間は日本文化に関する科目が増えるが、実際のコミュニケーション能力に関する科目は多くないことにあると言える。プログラム通りに文法的能力を先に教え、それを身につけたうえで、語用論的知識を導入するやり方は誤用率を高くする原因の一つではないかと考えている。

対策として、まずは、基礎段階に日本文化に関する科目を増やすこと、つまり、語用論的知識は言語的知識と共に一年生から導入すべきである。次に、上級段階には誤用能力や異文化コミュニケーション能力への育成科目について、ボランティアなど課外実践科目、プレゼンテーションを学習する科目、日本人留学生とディスカッションを行う科目、日本の提携校とダブル・ディグリー・プログラム、交換留学生プログラム及び海外インターシップの展開をやっていくべきである。また、試験の評価方法も語学知識だけではなく、誤用論的知識や異文化理解への知識も加えるべきである。

5. 2 教材

中国の大学日本語専攻の学習者は大半ゼロから日本語を習い始め、主に教室で日本語を学び、教室以外ではあまり日本語と接触しないので、教材を頼りに、教科書の間違った説明などにより、学習者に誤った推測をさせ得る。後述の資料1で述べているように、江蘇大学日本語専攻の四年間で一番大切な科目は基礎段階の「基礎日本語」と上級段階の「高級日本語」であり、「基礎日本語」は週に12時間（ほかの大学も大半は週に8～12時間である）あり、基礎段階の2年間で一番重要な科目として、毎日少なくとも2時間はある。

「基礎日本語」の教材の選択は何より重要であると言える。現在中国で広く使われている基礎段階の教材は『基礎日本語教程』、『総合日本語』、『新編日本語（修訂版）』、『新編基礎日本語（修訂版）』、『新大学日本語』などあるが、中国の華東地域⁽⁶⁾を中心に、よく使われているのは上海外国語教育出版社2009年出版された『新編日語（修訂版）』（元は1993年版である）で、江蘇大学日本語専攻もこの教材を使っている。

この教材を選んだ理由は文法の説明が整っていること、内容の量が教育プログラムに合っていること、高級段階のシリーズ教材『日本語総合教程』もセットされていることなどあげられるが、元の1993年版に比べて、単語と会話に新しい内容を取り入れているが、書式はほとんど変わらず、表現も文法上は正しいが、実生活にはあまり使わない例が多く見られ、語学能力と語用論的能力を隔てて説明している箇所が多いと指摘されている。基礎段階の学習者は教科書に載っているものが正しいと思い、暗記し、頭に覚えておいたら容

易に変えられない。もし、教師もはっきり説明しなければ、表3の誤用率はまさに真面目に勉強した証拠とも言えよう。

90年代後半から語用論的知識の教育について盛んに行われるようになるに従い、新しい日本語教材も次々と出版されてきた。新しい教材の選択に取り組まなければならないが、日本語専攻用の「基礎日本語」と「高級日本語」にふさわしいシリーズ教材は簡単には見つかからないのが現状である。語用論的要素を取り入れた日本語専攻用教材の開発が今後の大きな課題だと言える。

5. 3 教員

教室を中心に展開している中国の大学日本語専攻の教育現場に教科書の他に教員も重要な役割を果たしていると考えられる。北京大学、北京外国語大学、上海外国語大学のような一流大学は教員の質が高く、研修チャンスも多くあるのに対して、数多くの二流、三流大学は学生の急増により、教員不足や教学研修不足など、日本語の教育水準が保証できていないことも事実である。毎年中国日本語研究センターで様々な形で日本語教員研修を行っているが、参加人数が多く、研修時間が短いなど、研修効果が疑問視されている。また、日本への研修も多く制限があり、211や985大学⁽⁷⁾でなければ、申込みさえできないこともある。こうすれば、中国における大学日本語教育の差もさらに大きくなるだろう。

20世紀80年代の「日本語教師培訓班」⁽⁸⁾のような教師培訓班の再開が望まれている。大学の日本語教員であればだれでも入ることができ、日本語の教授法から日本の歴史、社会、文化等各方面の知識の特訓を受けることによって、教員が視野を広め、語用論的知識を身に付け、異文化に対する理解を深めるようになる。こうすれば、学習者に日本語を教えるとき、日本語の形式、日本語の構成そのものを教えるばかりでなく、言葉の構成と言葉の中に含まれている文化的含みをも教えることができ、学生の文化精神の養成にも役立てることができるだろう。また、教員採用の場合も日本へ留学した経験のある人物を優先採用することと日本人教員の比率を拡大することも重要だと言える。

5. 4 教授法

外国語の教授方法も自国文化の影響を受けると言われているが、「读书百遍其义自见（本を百回読んだら、この意味も自然に分かってくる）」という中国の伝統的思想を受け、模倣、繰り返し、暗記など受動的な「構造中心」法が中国における外国語習得の代表的な教授法としてあげられる。確かにこの教授法は20世紀70、80年代、日本語人材の育成目標は翻訳人材と通訳人材であった時期に大きな役割を果たしていたが、今の社会では日本語によって日本人や日本の社会から役立つ情報を得ることだけではなく、いかに日本人や日本の社会に情報を伝え、いかに考える手がかりを主張していくかという高い目標に変化し

たので、従来の単なる「構造中心」の受動的教授法から実践的異文化コミュニケーション能力の育成を目指す行動、問題解決、比較等能動的教授法へと変えなければならない。要するに、日本語を教えると同時に日本語で物を考えるための方法を与え、その方法で何かをする能力を養うことが大切だと言える。教授法の革新は教育プログラムの更新、語用論的教材の開発、教員の語用論的質向上と共に、中国人学習者に相応しい、特色のある教授法を作り出さなければならない。

6. まとめ

異なる文化背景を持つ人々の間では言うまでもなく、同じ文化背景を持っていても意図しないところでの誤解やミスコミュニケーションが生じる。本論は中間言語における誤用を正視したうえで、日本語教育の効率性を考え、少しでも短い時間で日本語でより柔軟で円滑なコミュニケーションができるようになることを目的としている。中国大学日本語専攻の学習者の失敗点を分析し、その誤用から思考様式の移植、レトリック文化による連想の違い、語用ルールの違い、不適切な言語のインプット、言葉の意味転換の違いによる言葉と文化の違いを探り、教育プログラムの更新、語用論的教材の開発、教員素質・能力への向上、教授法の理論から現場への指導という面から異文化理解への手がかりにするという日本語教育現場に生かす方法について考察を行った。いかにして中間言語論に基づく誤用によって日中文化の壁を越えることができるか、中間言語語用論における実証的研究を通して、確実にさまざまな習得理論を教育現場に生かすことが、今後中国における大学日本語教育の課題として望まれている。

[付記]

本稿は江蘇大学教育教学改革と研究重点プロジェクト 2011JGZD029 号「外国語専攻人材創造能力と職業素質の育成について」に基づいて研究したのである。

[注]

- (1) 中国の大学日本語教育は外国語専門教育としての日本語専攻と第2外国語としての日本語教育（現在では通称、「大学日語」）に分けられるが、本研究の大学日本語教育は前者の大学日本語専攻について考察する。
- (2) 表 1 は劉紹忠（1997）、伊藤恵美子（2003）、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（2008）、龍翔（2012）を参照にまとめた。
- (3) 8種類雑誌はそれぞれ『解放軍外国語学院学報』、『現代外国語』、『外国語』、『外国語教学』、『外国語教学と研究』、『外国語学刊』、『外国語研究』及び『外国語と外国語教学』のことを指す。中

国における外国語研究の中で一番有名で権威ある雑誌である。

- (4) 小語種は英語以外の外国語のことを指す。中国では外国語学習者の数によって大言語と小言語という風に2つに分けられ、学習者の一番多い外国語は大語種（英語）と言い、他の外国語はすべて小語種ということになるが、二番目の日本語も小語種に属している。
- (5) <http://d.hatena.ne.jp/ohnosakiko/20100809/1281348120> (2012/10/15)
- (6) 華東地域とは、中国東部の呼称で、上海を中心に江蘇省、浙江省地帯を総称した長江デルタ地帯のことである。山東省、江蘇省、安徽省、浙江省、江西省、福建省、上海市が含まれる。
- (7) 211 工程とは、中国教育部が 21 世紀に向けて 100 校の大学を選び、そこに重点的に投資をしていこうというプロジェクトのことである。指定された学校は「211 工程重点大学」と呼ばれ、それまでの「国家重点大学」に替わるものとして 1995 年に定められた。985 工程は 21 世紀教育振興行動計画に基づいて 1998 年に定められたもので、211 工程重点大学の中からさらに一部大学を選び、世界の一流大学にするために重点的に投資していこうというプロジェクトのことである。
- (8) ここの日本語教師培訓班は俗に「大平学校」と言い、1981 年に開学した「日本語教師培訓班」は中国の日本語教育のための教員養成を目的とし、毎年全中国の大学より 120 人の日本語教師を迎え、5 年間で 600 人を養成した。「培訓班」を終了した人のほとんどは元の大学に戻って日本語教育の第一線で活躍し、いまや中国の日本語教育を支え、リードする中堅的な存在となっている。

参考文献

- 伊藤恵美子 (2003) 「中間言語語用論の潮流—実例研究から実証研究へ、共時的研究から通時的研究へ—」『ことばの科学』第 16 号名古屋大学言語文化研究会 87 - 104
- 王国華 (2003) 「中国人日本語学習者が間違いやすい表現について」北陸大学『紀要』第 27 号 115 - 122
- 王忻 (2006.09) 『中国人学習者にみられる誤用の研究』外国語教学と研究出版社
- 岡田もえ子 (2010) 「語用論的視野に立つ英語教育」『専修大学外国語教育論集』第 38 号 13 - 28
- お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション (2008) 『言語文化と日本語教育増刊特集号、第二言語習得・教育の研究最前線』191 - 243
- 何慈毅等 (2012) 「『新編日本語 1 (修訂版)』から見る日本語精読教材の編集理念」『考試週間』第 18 期 8 - 9
- 何自然 (1996) 「中間言語語用論とは何？」『国外言語学』第 1 期 1 - 6
- 木村直美 (2009) 「第 4 章 長期在日中国人に見られる助詞」『に』『で』『を』の誤用分析——インタビューとブログからの談話分析』山口大学日本語教育論集』山口大学日本語教育研究会
- 胡文仲 (1999) 『異文化コミュニケーション概論』外国語教学と研究出版社龍翔 (2012.3) 『中国英語学習者のコミュニケーションにおける語用論的誤用についての研究』中国書籍出版社
- 近藤佐智子 (2009) 「中間言語語用論と英語教育」上智短期大学『紀要』第 29 号 73 - 89
- 島田かおり (2011) 「日本語学習者の誤用分析—中国語母語話者の事例研究」山口大学人文学部国語国文学会『山口国文』第 34 号 96-106
- 修剛 (2012) 「中国における大学の日本語教育の課題と教材開発」中国における新しい日本語教材の開発を語る」中国大学日本語教材シリーズ完成記念公開研究会、国際交流基金日本語国際センター

- 鐘茜韻 (2012) 「国内における語用学研究：現状、方法及び展望——2008～2012年8種類外国語権威研究雑誌に対する実証分析に基づく」『寧夏大学学报（人文社会科学版）』第2期 105 - 111
- 新屋映子等 (1999.12) 『日本語教科書の落とし穴—日本語教師がはまりやすい』アルク
- 盛文忠 (2000) 「日本語助詞省略の語用学思考について」『解放軍外国語学院学报』第4期 34-38
- 張麟声 (2001.10) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20例 [単行本]』スリーエーネットワーク
- 陳治安、袁淵泉「中間語用学の回顧と展望」『外国語教学』第27巻第6期 1-6
- 中島智子 (2005) 「異文化間教育研究と（日本人性）」、『異文化間教育 22 特集=異文化間教育研究と「日本人性」』アカデミア出版会、27-41
- 長友和彦 (1990) 「誤用分析研究の現状と課題」広島大学留学センター『紀要』1、23-40
- 福岡昌子 (2006) 「母語干渉と習得プロセス—破裂音習得から見た中間言語構築—」『三重大学留学生センター紀要』第8号、15-28
- 三浦恵美子 (2009) 「中国語母語話者における誤用の化石化と誤用分析～アグネス・チャンのブログ分析～」『山口大学日本語教育論集』山口大学日本語教育研究会
- 水野康一 (2001) 「日本人英語学習者による語用論的能力の発達について」『香川大学経済論叢』第74巻第2号 127-146
- 望月圭子 (2009) 「中国語を母語とする上級日本語学習者によるボイスの誤用分析——中国語との対照分析」『東京外国語大学論集』第28号 85 - 106
- 山崎恵 (2006) 「中国語母語話者の作文に見られる誤用」2006年全国応用日本語学術検討專題演講
- 羅曉傑、孫琳 (2003) 「誤用論と第二言語習得」『外国語学刊』第2期 103 - 105
- 李遠喜 (2002) 「日本語逆接表現についての誤用分析」『外国語と外国語教学』第3期 12-13
- 李培建 (2007) 「中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について」中央学院大学社会システム研究所『紀要』第8巻第1号 209 - 244
- 劉小珊 (2000) 「言語行為の文化的語用研究について——日本語の依頼表現を中心に」『解放軍外国語学院学报』第1期 40-44
- 劉紹忠 (1997) 「外国における中間言語語用論研究の現状及び我が国への示唆」第3期 74-80
- Jenny Thomas(1983)Cross-culturalPragmaticFailure,Appliedlinguistic,4:91-92

資料1 江蘇大学 2006年日本語専攻教育プログラム

課程種類	課程名	総 単 位	総時 間数	各学期週時間数								備考			
				一		二		三		四					
				1	2	3	4	5	6	7	8				
専 攻 基 礎 科 目	基礎日本語 (I)	24	360	12	12										
	基礎日本語 (II)	24	360			12	12								
	高級日本語 (I)	14	210					8	6						
	高級日本語 (II)	6	90								6				
	基礎日本語視聴説	4	60	4											
	日本語視聴	6	90		2	2	2								
	日本語会話	6	90		2	2	2								
	高級日本語視聴説	9	135					3	3	3					
	日本語基礎作文	4	60				2	2							
		97	1455	16	16	16	18	13	9	9					
	跨文化语言交际	2	30					2							
	撰 修	言語学概論	3	45						3					5 単位
		社外マナー	2	30							2				
		孔子思想と『論語』	2	30							2				
		漢語語音学	2	30			2								
中国文化概论		2	30			2									
		5	75			4		2	3	4					

専攻 (方向) 科目	必修	日本語論文指導	1	15								1
		翻訳理論と実践	4	60					2	2		
		日本語概論	2	30				2				
		日本歴史	2	30	2							
		中日文化比較研究	2	30					2			
		日本語文法	2	30					2			
		日漢語比較特論	2	30							2	
			15	225	2				2	6	4	1
	撰修	日本事情	2	30					2			
		中日交流概論	3	45					2			
		日本語新聞購読	4	60				2	2			
		日本語修辭	2	30							2	
		異文化コミュニケーション	2	30					2			
		日本語語彙学	2	30						2		
		日本語古典文法	2	30							2	
		日本文学作品選読	2	30						2		
		近代日本経済特論	2	30						2		
		日本商法	2	30							2	
		日本貿易実務	2	30						2		
		科学貿易理論と実務	2	30							2	
12 単位	国際貿易	2	30					2				
	税関実務	2	30						2			
	電子ビジネス	2	30							2		
	旅行概論	2	30					2				
	ガイド実務	2	30						2			
	日本語パソコン操作技術	3	45				3					
		16	240				5	12	12	10		